

## アダム・スミスと投機的事業者

根岸信先生が一生涯中國「經濟人」の研究と取組まれたることを想い、イギリス「經濟人」に關するこの未熟なる小文を  
老先生御座右にささげまつる——辰之助

### 上田辰之助

トマス・ホッブスがまだ母の胎内に在ったとき、イギリス社會はスペイン「無敵艦隊」來襲の報に脅かされ、人心の動搖は甚しかった。そのため未來の大哲學者は早産の兒として生れ、「恐怖」がその思想の基調となつたと傳えられる。

アダム・スミスが生れたのは一七二三年であつて、南海バブルの大恐慌を去ることわずかに三年足らず、それは俗に「投機的事業の時代」と呼ばれるほど亂暴で奇抜な事業計畫が盛んに世人を惑わせた時代であつた。丁度その頃かかれた『ガリヴァ旅行記』には「投機的事業者の大學」(the Laputian University, or Academy of Projectors)に關する諷刺がでているくらいだから、以て當時の世相察すべし、である。スミスの場合はホッブスの傳説とは少し違ふようだが、こういう世の中の風潮がスミスをプロジェクトクター嫌いにするのに全く無關係であつたとは考えられない。もちろん生國スコットランド

アダム・スミスと投機的事業者

獨特の社會的および經濟的事情は更に大きな影響を及ぼしたであろう。だが同時にその同じスコットランドからロー(John Law, 1671—1729)ははじめ大小いくたのプロジェクトが輩出された事實も忘れてはならない。すなわち蘇格人は國情からいえば大體においてスミスのように重厚で地味な、そして用心深い人間が典型的であるが、それとならんで世界を跨にかけて冒險し、中には世紀の大博奕を打つような事業家もかれらの間から出てきたのである。「蘇格人と鼠とニューカスルの砥石は世界中を旅行する」という諺が十七世紀にあつたらしい。「冒險的」と「用心深いこと」とは一見兩立し難い素質のようだが、二つながら蘇格人の性格のうちにあるといわれるのは根本においてスコットランドの自然條件と大いに關係があるものとわたくしは見ている。かれらがよき經營者をなす所以は茲にあるのではなからうか。それはそれとして、スミスがプロジェクトを山勘的な人間として大いに警戒したことは『國富論』にはっきり現われており、それがかれの場合には學問的にも相當重要な結論に導いているのである。その點を考察するのが本文の目

的である。

スミス問題に入る前に、プロジェクトというものがイギリスの社會でどういう風に取扱われていたかについて一言しておきたい。そもそもプロジェクトとかプロジェクトとかが人々から騒がれるようになったのは十七世紀に入ってからのこととみていい。いったいプロジェクト(project)は單なる「計畫」(plan)と違って不確實性が伴い、概ね冒險的なのがその特徴であった。プロジェクトが盛んに目圖まれた——いわゆる *boom* された——時代は經濟發展の黎明期にあたり、プロジェクトがだんだん態容を整え、合理化して來ると、「正規の事業」(regular business)に發展する。正規の事業すなわち企業である。だからプロジェクトは「企業」(enterprise)の前身であり、先驅者だとゾムバルトはいつている。またマーシャルの企業者論にも企業に想像力がいかに重要であるかを説いた一節があるが、それは企業のプロジェクト性を物語るものとみていいだろう。しかし十七世紀から十八世紀の大部分を通じて、プロジェクトは投機的なもの、インチキなもの、という社會通念がもっぱら行われてい

た。従ってそれを種に一儲けしようとする連中、すなわち「事業家」(projectors)なるものの評判がいははずはなす。

プロジェクトターの悪評はすでに十七世紀のイギリス文獻にいろいろあるものがある。ジェームズ一世でさえ一六〇四年の議會への勅語のなかでプロジェクトターを「蛇蝎」や「悪疫」と併稱したとされるし、ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1573—1637) やトマス・デッカー (Thomas Dekker, 1572—1632) のような劇作家は舞臺の上からインチキ事業家を嘲笑した。その代表的な芝居は一六一六年に初演されたジョンソンの喜劇『悪魔は馬鹿だ』(The Devil is an Ass)であるが、一日を限って、娑婆で思いさま悪業を働いて来いといって人間界につかわされた悪魔の乾分バッグ (Purse) でさえも、當時のイギリス社會に跳梁する悪黨どもには齒がたたず、ついにニューゲイト監獄送りの憂目をもつというのがその荒筋。劇中、生馬ではなく、悪魔の眼を抜いた悪魔の頭はミアクラフト (Meercraft) という名うてのプロジェクトターである。かれの合棒には女プロジェクトター (Lady

アダム・スミスと投機的事業家

Projectress)も出て来る。従ってこの劇にはプロジェクトターの遣り口についていろいろのことが描寫されていり、参考になる。例えば、「プロジェクトターとは何ですか」と訊かれてミアクラフトの手代は次のように答える——

Why, one, sir, that projects  
Ways to enrich men, or to make them great,  
By suits, by marriages, by undertakings:  
According as he sees they humour it.

Act 1, sc. 3.

そりゃあ、旦那様、事業家のことですよ。人を金持にしたり、出世させたりするためいろいろの道を考案するあの事業家のことです。方法は訴訟、縁組、事業計畫など、お客様の御意を迎えていかようにも致します。

『悪魔は馬鹿だ』一・三。

それからもう一つ大切なポイントはプロジェクトターがその考案の實施に對して政府の特許を得て、一種の獨占權を與えられたため、獨占業者として嫌われ、警戒されたことである。ジョンソンのこの喜劇にもその點に關す

るインチキが巧みに織込まれている。フィツドットレル (Fitzdotter) という少し甘い田舎の庄屋様はミアクラフトの埋立地計畫なるものに旨々と乗せられ、成功の曉は「水下領の公爵様」(Duke of the Drowned-Lands) と夢中になって、きれいに、全財産を巻きあげられてしまふのである。この埋立地計畫にはもちろん國王の特許が要るのであって、埋立完成の上は土地の半分ないし四分ノ一が王室の所有地となるとジョンソンはプロジェクトターにいわせている。(第二幕第一場)

ところでプロジェクトターといっても、悉く悪性な周旋屋みたいな人間と限らない、なかには正直で手堅い事業家もいて、國家の經濟進歩に貢献したと云って、かれらのために大いに辯じたのがダニエル・ディフォウ (Daniel Defoe, 1660—1731) である。ディフォウは一六九七年『プロジェクト論』(An Essay upon Projects) を出版して、冒險的事業家の功罪を論じ、とくにその仕事の積極的評價に努めた。この種の文獻で社會科學的價值のあるのは恐らくこれを以て嚆矢となすのであろう。ディフォウは悪辣な、プロジェクトターについて次のよ

うに云う――

「たかが一介のプロジェクトといわれるような人間は取るに足らぬ輩である。二進も三進も行かなくなるまでに食いつめて、この上は奇蹟を待つか飢え死をするかの瀬戸際に立つ手合い。そしていくら思案投首しても、一向奇蹟が起りそうもないとなると、丁度役者が人形に大聲をださせるように、怪しげな繪か何かを塗りたて、珍奇を装っては新發明、新發明、と騒ぎ立てるより外に救いの道がなくなる。次に特許を取って、株式にする。今度は株券を世間に賣りつけるといふ段取だ。」(同書「プロジェクトズに就て」の項)

ディフォウと全く同時代の劇作家コングリーヴ (William Congreve, 1670—1729) の喜劇の「Love for Love. IV. 18」にも「彼奴はプロジェクト、狂信者、化學者、戀愛病患者、ヨーロッパ大陸の詩人と同じこと、全くの氣遣いだ」といふ文句が見出されるが、プロジェクトの同類と見られた人間の種類の列擧が面白い。之に反して、正直なプロジェクトとはどういふもの

か。ディフォウ曰く

「正直なプロジェクターというものは良識、誠實および巧智という公正にして明白な原則によって何かの考案に目鼻をつけ、その觸込みどおりやり遂げ、何人の懐中を掏ることもなく、遂にその事業を實行に移し、その實收を以て自己の發明の利益として満足する——さういふ人間である。」

(圖所)

こういってかれは世を益した模範的なプロジェクターの實例をいくつも擧げている。そしてこの點に注意されることはディフォウが外國貿易に従事するイギリス商人の價値を非常に高く買っているという事實である。これはいかにもディフォウらしく、他の人の筆を通じて讀むよりも一とこお、實感の迫るものがある。

If Industry be in any business rewarded with success, it is in the merchandising part of the world, who, indeed, may more truly be said to live by their wits than any people whatsoever. All foreign negroes, though to

インダストリーを奨励的の事業家

some it is a plain road by the help of contrivance, yet it is in its beginning all project, contrivance, and invention. Every new voyage the merchant contrives is a project, and ships are sent from port to port, as markets and merchandises differ, by the help of strange and universal intelligence, wherein some are so exquisite, so swift, and so exact, that a merchant sitting at home in his counting-house at once converses with all parts of the known world. This, and travel, make a true-bred merchant the most intelligent man in the world, and consequently the most capable when urged by necessity to contrive new ways to live; and from hence, I humbly conceive, may very properly be derived the projects so much the subject of the present discourse. And to this sort of men it is easy to trace the original of banks, stocks, stock-job-

bing, assurances, friendly societies, lotteries, and the like—Introduction to An Essay upon Projects.

もし「氣働イグニツトき」というものが、成功を以て酬いられる何かの事業があるとすれば、それは世界の貿易を擔當する人々の場合のことである。かれらこそ如何なる人に比べても餘計にその頭を働かせて生活するものだといって間違いない。一體、外國貿易というものはみな最初はプロジェクトであり、工夫であり、發明であつたのだ。尤も一部の人には習慣をたよりに眞直ぐの道を行くのが外國貿易であるが、「それは例外だ。」貿易商人が考案する新しい航海はどれもみな一つのプロジェクトであり、市場や商品目が異なるに從つて港から港へと船が廻送されるのは不思議な、普く行き渡つた情報組織のおかげである。しかもこの點において、或るものは非常に美事で、迅速で、正確だから、商人は自宅の帳場に坐しながら直ちに世界の如何なる部分とも話を交えるのである。このこと

と旅行とは本格的に仕込まれた商人を世界中最も知性に富む人間、從つて必要に促されれば、新しい生活の道を工夫するのにあたつて最も有能な人間、とする。本書の主題となるプロジェクトはこういう人々から派生するものと愚考するのは決して不當ではなからう。そして銀行、株式、仲買、保險、友愛（共濟）組合、富籤等の起源を辿り、それらが何れも「プロジェクトといわれる」上記の人々にはじまることを明かにするのは容易である。（『プロジェクト論』緒論）

ディフォウはのちに『イギリス商人大鑑』(The Complete English Tradesman)、『イギリス商業の一計畫』(A Plan of the English Commerce)などをかゝつて右の論旨を一層發展させた。かれは近世イギリス社會の中堅となつた健全なプロジェクト階級の最も熱心な代辯者であつたといえるだろう。

## 二

ディフォウの『プロジェクト論』がでてから約八十年

を経て世に問われたスミスの『國富論』には依然としてプロジェクト不信の空氣がただよっている。其處ではプロジェクトは遊蕩兒と同列に扱われ、ときには健全な經濟發展の見地から敵視されているように見える。そういう論法がもっともはっきり現われているのがスミスの徴利法論である。

十八世紀後半に經濟自由主義の闘士として登場したスミスが中世紀以來の遺物たる徴利法を辯護したことは、航海條令の支持と共に、意外な出來事ともいえよう。流石にかれは徴利の禁止は説かない。利率を法律によって適當に制限するのがいいといったのである。だから議論のポイントは何パーセントが正しいか、望ましいかであった。イギリスでは一五五四年の法令で利率は一割と規定されたが、一六二四年には八分、アン女王の治世には五分に引下げられてスミスの時代に至った。かれは何パーセント位の利率をよしとしたか。曰く、現に金融市場に行われている最低利率をやや上廻った率がよろしい、と。すなわち最も確實な擔保物件を提供して借入金をする人人が通常支拂う利率より少しばかり高い利率が適當

アダム・スミスと投機的事業者

だといふのである。最低利率以下にその點を決定すると、その効果は殆ど徴利禁止と同じこととなる。丁度最低利率の點になると、どういふことになるかという、法規に忠實な貸主は最低利率を遵守するが、その代り相當の擔保を入れない借主には一切貸さないだろう。それができない借主は仕方がないから、法外に高い利息を拂つて金貸から融通して貰う。それは決して健全な状態ではない。當時、大ブリテンでは公債の利子が三分、一般金融市場の相場が四分ないし四分半であったから、法定の最高利率が五分となっていたことはスミスの主張と一致していたわけである。右のような意見を述べたのち、スミスは更に言葉をつづけていう――

「茲で注意を要する點は、たとい法定利率は最低市價をやや上廻らなければならぬといつても、あまり上廻りすぎてもいけないといふことである。例えば、大ブリテンの法定利率が八分ないし一割の高率に規定されると、貸出されるはずであった資金の大部分は遊蕩兒プロヂェクチャーやプロジェクトプロジェクトに貸しつけられるだろう。かれら以外にそんな高利を

平氣で拂う人間はないからである。眞面目な人たちは資金の融通を受けても、これによって得る見込のある収益の一部分しか「金利として」支拂う意思がないから、敢て競争相手になろうとはしないだろう。その結果、國內資本の多くの部分は、これを極めて有益に、また有利に、使う見込が最も多い人々の手を離れて、これを浪費し、消滅させる見込が最も多い人々の手中に投ぜられるだろう。これに反して、法定利率が最低市價のほんの少しばかり高い點に規定される場合は、眞面目な人々は借主として到る處で、遊蕩兒やプロジェクトターよりも喜ばれる。金を貸す人は後者から冒險的に受取るのと殆ど同じだけの利子を前者から受取り、しかも、その資金は遙かに安全である。かくして國內資本の大部分はそれが有利に使われる見込が最も大きい人々の手中に投ぜられるのである。」

この一節でスミスのプロジェクトター觀は十分に明かにされている。それは「不眞面でない生産的」なこと遊蕩兒

と何等選ぶ所ない、という觀察である。金利を高率に保つような法律をだせば、金融の便宜を受けるのはそういう「浪費者」だけだといって、プロジェクトターの計畫は必ず失敗に終るものと決めてかかっている。前掲ディフォウの所論と大分違ふ。そこでこれに對して、正面から挑戦し堂々論陣を張ったのがベントム (Jeremy Bentham) であることは有名な事實である。かれはかなりスミスの後輩であり、また崇拜者であったが、一七八七年、よわい三十九歳のとき、『徴利の辯護』と題する論著を發表して『國富論』における徴利法の支持を批判した。一寸意外に感じられることはベントムがこれをロシヤの旅先き——「すべての研究資料から千五百哩離れた地點」(かれの手紙の一節)——で一友人宛に一連の書簡の形でかいた事實であるが、その一部分はとくに「スミス博士への一書簡」ということになっている。

『徴利の辯護』がどんな性質の文獻であるかはその長い表題をみればいくぶん想像がつくだろう。

DEFENCE OF USURY; / Shewing the Impolicy of the / PRESENT LEGAL REST-

RAINTS / on the terms of / PECUNIARY  
 BARGAINS / in a Series of Letters to a Friend / to which is added / A LETTER / to /  
 ADAM SMITH, Esq. LL.D. / on the Discouragements opposed by the above / Restraints to the Progress of / INVENTIVE INDUSTRY / 1787 /

## 『徴利の辯護』

金銭取引の條件に對して現在課せられている法律上の諸制限が不當な措置であることを一友人への一連の書簡の形で示し、併せて右制限によつて發明的産業に加えられる意氣阻喪の諸手段に關して法學博士アダム・スミス殿宛に認められた一書簡をこれに添附する。一七八七年

茲でわたくしの問題とするのは主として「アダム・スミス殿への書簡」である。それは書簡第十三と銘が打つてあつて慇懃な、しかし自信たっぷりな前文を以てはじまる。そのなかでベンタムは自分がスミスに負う學恩の至大なことを率直に認め、恩師から授けられた知的武器

アダム・スミスと投機的專業家

を以て恩師自身を攻めるに至つた廻合わせを印象深く述べ懐いてゐる。

## 三

本論に入つて、先ず提起されるのはプロジェクトに對するスミスの反感である。ベンタムは明かにかれらの味方であり、辯護者である。かれがプロジェクトの仕事の説明するのに「發明的産業」などという奇妙な熟語を「發明」したのも苦心の存する所といわなければならぬ。冒險的事業は立派な實業であつて必ずしも虚業ではない、新しい事象を發明して社會に貢獻する歴史たる「産業」だという意味に解釋できる。石部金吉的産業人を愛した蘇格蘭人スミスに對して派手に活躍する太腹な事業家に期待をかけたイングラント人ベンタムの挑戦である。『徴利の辯護』の著者は「スミス殿」に向つて

「わたくしが僭越をも顧みず、敢て貴下に向つて異をたてます理由は別儀ではございません。わたくしからみれば、何等責むべき種類の人々でない

ばかりか、むしろ「社會的に」最も功績のある人  
たちでありながら、不幸貴下の逆鱗に觸れた人々  
の辯護に立とうというわけであります。それはプ  
ロジェクターズのことです。そしてプロジ  
ェクターの忌わしい名の下に、貴下がとくに理解  
されるようにお見受けする者は何かといえは、富  
の追求において何かの新方面、殊に發明の方面に  
進出するような人間のすべてであります。」

スマスは、前にも述べたように、「遊蕩兒およびプロジ  
ェクター」とかいているが、ベンタムはこういう表現方  
法は甚だよろしくない、と考える。なぜならば、殊更に  
悪い連想を惹起するような用語を使って讀者の頭に、或  
る先入感を注ぎ込むからである。ベンタムはこれを「音  
響による暴逆」(the tyranny of sounds)と呼ぶ。た  
しかに「音響による暴逆」によつては公正にして冷靜な  
る學問的議論はできにくい。スマスのように、はじめか  
らプロジェクターは亂暴、愚昧、馬鹿らしさ、凶悪、浪  
費等あらゆる悪徳の別名だというような前提をたててか  
かったのでは、討論無用ということになりそうだという

のである。

「遊蕩兒とプロジェクターとはどんな高利でも平氣で  
拂う」というスマスの言葉に對してベンタムはいう——  
遊蕩兒は別として——かれは遊蕩兒の辯護人ではないか  
ら——プロジェクターが高利を拂わなければならぬこ  
とは事實である。それはプロジェクトといわれるものが  
本質的に「新奇な」事業であり、危険性も大きいからで  
ある。然かるに、スマスの支持する最高法定利率は商人  
でもすでにその道で十分賣込んだ老舗の經營者たちに都  
合がいいように考慮されている。殊に相當な擔保の提供  
が條件となつていたので、大概のプロジェクトは金融の  
道をたたれてしまい、うだつがあらがない。それによつ  
て良質なプロジェクトまで窒息されたのでは、國民經濟  
の發達上、困る。一體、プロジェクトという人は白眼  
視するが、どんなに健實な事業だつて、その發端はみな  
プロジェクトであつたのではないか、とベンタムは反問  
する。

更に進んでかれはスマス自身の論理を以て『國富論』  
の矛盾を衝く。すなわち徵利法の支持は經濟自由の原則

に牴觸するものだ」と論じて、

「凡そ成年に達し、健全な精神の持主である人間が自由にかつ活眼を開いて行動する場合、その人は自己の利益を守る見地からして、自分が適當と考ふるような金錢調達の契約を結ぶことを妨げられてはならない。また（必然の歸結であるか）何人も自分が承諾するのを適當と考ふるような如何なる條件においても、その人への資金供給を妨げられてはならない」

という結論に到達する。簡単にいうと、各人は自分自身の利益について最良の審判者だから、金錢貸借は當事者たる個人の自由に任せろ、法律や規則でみだりに干渉するな、ということである。紛う方なき、スミスの原理である。だから『國富論』からそれを基礎づける議論を拾いだすことは決して困難な業ではない。ベンタムは、縦横にスミスの言葉を引用して敵陣に斬り込んで行く。例えば「奢侈禁止令や外國贅澤品の輸入禁止によって國王や大臣たちが私人の經濟を監視し、かれらの支出を制限しようとする氣構えを示すのはこの上なくおこがましく

アダム・スミスと投機的專業家

も僭越の沙汰」というスミスの言葉についてはこのような「權威ある者の論調はひとり貴下の勇氣を以て企つべく、ひとり貴下の大才を以て安じて採用し得べきもの」といって、半ばおだてたような、半ば揶揄したような評言を弄している。「私人がいくら浪費しても國家を破産させる心配はない」といったのは一體誰か、況んやプロジエクターは札つきの浪費者たる遊蕩兒に比べて、その數もずっと少ないのである。しかも絶對數の少いプロジエクターのうちには、眞面目な、すなわち浪費者でない專業家も相當いるとすれば、そんな少數者を目標として大掛りな法律を制定するのは果して當を得た處置であらうか。ベンタムの論鋒は甚だ鋭い。

私人の經濟活動を法律によって取締る場合、その前提となつてゐる考へ方は立法者は常に理性を以て、民衆は常に感情を以て、行動するということである。だが立法者の理性なるものをみると、「社會的關心や研究の結果ではなく、放恣と傲慢との所産である所の瞬間的にして侮蔑的な一瞥」に發するものにすぎない。それを個人の「低俗な」理性の代用品として押しつけられては堪らな

い。そういつてベントムは「この奇妙な「官民の」競争において個人の側には利益——一個の人間の名聲と財産とが含まれる全利益——が確保し得る最も完全にして精細な知識と情報とがあり、立法者の側には最も完全な無知がある。かれら（立法者）が知りうるすべては企業が一つのプロジェクトである、ということだけである」とスミスのお株を奪ったような強い意見を吐く。多分スミスはくすぐったい顔をしてこれを讀んだことだろう。けれどそれは『國富論』第四編第二章で國內産業への投資に關して著者が述べている所の換骨脱胎にすぎないからだ。いな、この場合、スミスにとって不利なことには、かれ自身の表現の方が、ベントムの夫れよりはるかに激しく斷定的である。

以上いろいろの角度からスミス説を批判したのち、ベントムは最後に何故スミスほどの大學者が徵利法を支持するような誤謬を犯したかの問題を提出して自問自答する。そしてそれはスミスが世人の聲やこれを支持する法律の規定に惑わされて、徵利は悪しきもの、金貸は邪曲の徒、と思ひ込み、これに關連してプロジェクトも亦、

愚かな蔑しむべき人種でなければ、悪質で破壊的な人間と斷言したためでないかと考へる。その上に、たまたまスミスの觀察の對象となつたプロジェクトが不幸にして好ましからざる部類に屬していたため、愈々いままでの偏見を確認する結果となつたことも推察できる、といつてゐる。

然らばこれだけ激烈で執拗な攻撃を受けたアダム・スミスはいかに應戦したか。或はこれに對してどのような感想を洩らしたか。實は肝腎なこの問題に關して後世に残された記録があまりなく、事情がはつきりしていない。何しろ『徵利の辯護』が發表されたのがスミスの死ぬ三年ほど前のことだから、健康や氣分の關係、その他もろもろの事情があつたのか、ベントムはスミスから直接回答に接することはできなかった。ただ間接には友人からの又聞きでスミスがベントムの論著を推賞した旨を知つたが、要するに噂話にすぎない。レイはこのことを重視して、もし『國富論』の次の版が著者の生前にでていたとしたならば、その徵利法論は著しく變更されたであらうと書いてゐる。

だがこれも亦一人の傳記者の想像にすぎない。スミスの眞意を傳えるものとはいひ難い。それよりも遙かに意味深長と思われる傳説はベンタムが問題の自著一篇をミスに贈つたのに對して、ミスが同じく自著の『國富論』の最新版を以てこれに酬いたというあの挿話である。ミスはその際、ただ署名入りの『國富論』一冊をばつんと送つただけで、書簡も添えず、また他に一言半句の挨拶もしなかつたとのことである。

蘇格人アダム・スミスの沈黙、甚だ雄辯といわなければならぬ。

### 結 語

これで一應この稿を終らなければならぬが、實はわたくしの最初の計畫では、スコットランドが生んだ偉大なプロジェクト、W・パタソン (William Paterson, 1658—1719) に関する若干の考察を『アダム・スミスと投機的事業家』の第二部として加えるつもりであった。ところがベンタムが思わず長談議になつて、割當ての紙幅がつきてしまったので、茲では簡單に問題の所在だけ

アダム・スミスと投機的事業家

を明かにしておきたい。

パタソンはジョン・ローとならんで十七—八世紀におけるスコットランド出身の最も著名な金融事業家であった。かれは三つの點で歴史的人物——イギリスの『國民傳記辭典』(D.N.B.)には立派に載つてゐる——と考へられる資格がある。第一、英蘭銀行の創立者であつたこと、第二、十七世紀末にスコットランドがその國運を賭して乗りだした植民地獲得運動の現れであつたデイリエン計畫 (the Darien Scheme) の中心人物であつたこと、第三に、一七〇七年の英ス合邦への貢獻である。その外、かれは幾篇かのすぐれた經濟論策を發表して、著者としても相當高い地位を占めていた。以上いずれも重要な仕事であるが、なかならず英蘭銀行創設につくしたパタソンの業績は後すべからざるものがあつたといつても決して誇張ではなからう。同行設立後、程なく出版されたデイフォウの『プロジェクト論』にはかれの名がはつきりと擧げられている。(なおデイフォウとパタソンとは相識の間柄であつた。) またマコーレーもその『英國史』で英蘭銀行創立者としてのパタソンについて

偏見に満ちた、しかしかれの重要性を認めた、考察を試みている。

ところで不思議なことに、パタソンと同郷のアダム・スミスは『國富論』の何處でも——英蘭銀行の歴史を敘述している部分においてさえ——パタソンの名前を一度も筆にしていない。またデイリエン計畫には一言も觸れていないので、その關係でもパタソンは出る幕がないのである。これは果して偶然の看過であつたらうか。それともスミスはパタソンのことを全然知らなかつたのであろうか。わたくしはむしろ「黙殺」であつたと想像する。先ず、スミスがパタソンについて無知でなかつたと推論し得る證據は十分に擧げることができる。(その論證は別の機會に譲る。)ことによると諸制度の歴史的敘述には關係人物の名前を省略するのが『國富論』の執筆方針かとも思つて調べてみると決してそうではない。當時のフランスを破産状態に陥れたローについては、ミスタ・ローと敬稱まで附けてその計畫をむしろ好意的に論評しているのである。

もしも、私見のように、パタソンの場合、スミスの沈

黙が故意であつたとするならば、勢い問題は「何故?」ということになる。『國富論』の博識な著者は一體どういふわけで英蘭銀行の創立者ウィリアム・パタソンを黙殺したか。なぜかれはスコットランドの東印度會社とも呼ぶべきスコットランド會社の設立とその國家的事業計畫たるデイリエン・スキームを全然無視したのか。その關係からしても何故パタソンを黙殺したのであろうか、に好奇心がそそられる。

未だ何人も問題としたことがないらしいこの興味あるアダム・スミスの沈黙については、遺憾ながら本文では一つの宿題として未解答のまま残しておくより外、仕方がない。(多瑪書屋八・五・五四)

「おことわり」紙面の關係で用意した「註」を一切削除せざるを得なくなりました。讀者諸賢のお宥しをおねがい致します。(上田)